

各 個 研 究

国語教材における基本語彙の研究

— 中学現行教科書を主として — (第一報告)

鈴木 洋 一 郎

I ま え が き

戦前の国語教育は主にことばの理解および鑑賞する教科書中心の教育で、ことばの一面をのみ学習経験させるにとどまるという消極的な言語活動の授業になりがちであった。そこでこのような指導の反省から出発した新しい国語教育はことばの習慣・態度・技術能力を身につける言語の全的経験(ランガーシュ)を通し社会における人間の形成を目指し、更に進んでは文化を創造し、社会の福祉を達成しようという目標を樹てたのである。

しかし日々の生活におけるわれわれの言語経験はきわめて広くかつ多岐複雑にわたり、われわれがある思想感情を表現伝達しようとするとき、その場における心理または表現技術によって使用した語彙がじゅうぶんにして適切な効果をもたらさないことがあった。またこれら表現語彙のなかには極めて稀にしか使用されないものもあり、また繰り返し用いられるものもあつた。国語教科書はまずこれらいろいろな言語活動の進め方に一定の目標と体系とを示し文字の制限から語彙、文型の整理へと発展した。教育漢字の制定、基礎語ならびに基本語彙の調査・基本文型への関心の高まって来たことからでもわかる。しかし基本語彙の調査は談話語彙よりも多くの読書語彙をもつ教科書の語彙の構成に向けられず、主に国語政策の基礎資料に供するという方向が強く打ち出されたのである。従って教材資料としての価値をもつ教科書の編集にあたり次のような調査または考慮がなされてきたかは疑問である。

- (1) 語彙の選び方その配列についてじゅうぶんの注意をなされたか。
すなわち基本語彙に対する関心およびその逐年的な配列について考慮されていないのではないかと思う。中学校教科書は小学校と違い既成作品を教材にすることが多いため語彙の検討は第二義的になってしまい、巻末の語彙の索引を見てもじゅうぶんとは言えない。
- (2) 各学年に教材を選択する際に、生徒の精神の発達や心理の成長変化をじゅうぶん考え、また各単元との連関をもっと有機的にせねばならないし、その学年における他教科との関係についても徹底的に考慮がはらわれているかどうか。

以上の諸点が挙げられるが、ことばの全的経験を強調する国語教育において国語の将来を決するものとして基本語彙の問題は閑却にできないものがある。

II 基本語彙の概念とその調査法

従来の研究によると、基本語彙は普通 1500～3000 の領域をもっていて教育漢字のように数字的な規定がない。従って教育的成長から考えると小学校における基本語彙と中学のそれと比較すれば、おのずから差違段階がある。しかし、われわれは次のように考えてみる。中学における基本語彙は日常生活で接する当用漢字内で書かれ、(1)ふだんの会話・あいさつ・講演、(2)ラジオのニュース、(3)教科書、(4)新聞雑誌、(5)小説・随筆・評論

など文学書や教養書の五つの領域で使われ、しかも頻度数の多く、使用範囲の広いものと規定できる。それ故、この研究が進めば標準語・方言の限界、その範囲や漢字制限の問題が国語政策的な意図のもとと言うよりはむしろ科学的に究明され今後使用されるべき優勢語をも発見または推定され国語改良とその教育の能率化に役立てることができると考える。

この基本語彙の調査にはまず土居教授の考えられた約1000語の基礎日本語のもとに集まると予想される語を判断して取り上げてゆく主観的方法と教育漢字で書かれた語彙や頻度数の多く、使用範囲の広い語彙を統計的に求めようとする客観的方法とあり、この二つの方法から基本語彙を抽出できると考える。

この研究ではその最も初歩の試みとして現行教科書にその資料を求め、その頻度数の調査から出発し、基礎語との対照から帰納的に結論することは更に他の資料の調査の結果を待って行うことにする。

III 現行教科書の語彙調査と基本語彙

調査資料 本校中学一年使用教科書
麻生磯次編著 私たちの国語
一年上・下 秀央出版

資料選定の動機

中学一年はまず小学校において教育漢字をだいたい修得し終えた後の学年であり、国語における基礎学力が更に充実進展してゆく第一年目である。またその使用教科書が学習指導要領や教科書検定基準に盛られている教育目標を完全に達成させようとの線に沿っている以上、基本語彙の抽出も他の資料に比して豊富かつ容易と考えられる。またこの教科書と比較対照する資料として選んだ加根俊学氏の学習基本語彙試案は「小学校児童を対象として実態調査し現行の国語教科書、辞書に表われている語彙を比較しながら選び出したもの」と作者が言う通り六カ年の修得語彙から抽出されたものである以上、この中学一年への適用が自然にできるものと考えたのである。

調査実施

1. 学習基本語彙試案の検討

学習基本語彙試案（以下略して試案という。）は興水実氏との共著「基本語による国語学習指導」（刀江書院発行の中の一章であるが、作者も考えているように、試案は今後多くの資料を通して「つくらねばならない」としているが、一応できているこの資料を検討することから始める。

品詞別に名詞を除外して代名詞から始められてある試案語彙を（表1）のように分類整理してみると、次の諸点に注意することができる。

- (a) フ行、ウ行の語彙が少ない
わかる 笑う 忘れる 練習する 朗読する 理解する 悪い 若い
このような語彙は見おとされている。
- (b) 品詞の区分に一貫性をもたせてほしい
一語がその置かれる位置により副詞的修飾語彙となり、形容詞的修飾語彙となり用言から名詞への転化もあり得るが、品詞別に考えられた試案はその基本形の品詞を基礎語としてその語彙の中に転化される語彙を包括すべきである。
- (c) 語彙抽出に更に注意すべきである。
漢語合成によるサ変の動詞また形容動詞を多く見おとしており、使役受身の意味の添加された動詞、自動詞や他動詞の語彙選択、副詞の中にみえた象徴音の多くにもなお検討を要するものがある。
このように決定函数としての基本語彙函数（基本語彙群の中心となる語彙）の説明がされない限り語彙選択も主観的になって調査の結果にも変化を生ずることがある。

2. 調査の結果とその考察

本調査においては、名詞・代名詞・助詞の語彙は対象から除外し、新たに形容動詞の語彙を設け自立語についてのみ調査してみた。

先ず動詞・副詞の語彙が断然多く前者は調査総語彙の60%以上、後者はその20%近い率を示している。普通、動詞語彙の2～3倍の数をもつ名詞を調査せねばはつきり言えないが、動詞および連用修飾語たる副詞が多いということは教材が全体

的に叙述的・描写的なものが多くなっているということの意味し、中学の低学年の心情にあう語彙が豊富になって来ていることがわかる。(表2)

次に試案語彙の教科書中への頻出率は各品詞とも50%以上(70%~52%)に及び全体の平均も約60%を示している。試案の語彙選択に多少問題のあったこととしても一応試案がだいたい基本語彙の線に近い。(表3)

また試案語彙と新出語彙と比較してわかることは、形容詞において前者が後者の3倍の異語数を持ちながら、(表3)形容動詞語彙においては反対に半分近く減少している。しかし、この二つの品詞の延語数は下の表のようになり、試案語彙の

	形 容 詞	形 容 動 詞
試 案 語 彙	1166	294
新 出 語 彙	181	255

延語数の増加率が著しいのは試案語彙の抽出がよかったことを示している。しかし叙述に工夫をしているということは形容動詞の異語数の多いことからわかり、また教材が作家作品にかたよっているのではないかとも思われる。

最後に、基本語彙決定の一要因として頻度数の多い語と考えるならば、教科書において2以上の頻度数をもつ語彙は、そこにとられた総語彙の52%になっておるし、……(表2)また、二つの資料を通じて頻度数の多い語彙もその総語彙に対し52.5%となっている。……(表4)以上

の結果から現行教科書の基本語彙量はここに挙げられた総語彙の50%を越えるところに線を引くことができるという第一の想定が出てくるのである。

IV む す び

以上調査の結果について述べたが、また資料も不足で九牛の一毛に過ぎないことを痛感する。ただ今後次のような見透しで計画を進めてゆきたいと考えている。

- 1 中学の同学年の他の国語教科書の語彙調査とこの調査との比較
- 2 生徒のもつ基本語彙の調査
基本語彙の理解度および表現語彙として作文に表わされた基本語彙の頻出率
- 3 基本語彙群の想定
これは基本語彙の検討の際、かつてオクデン教授が850字の基礎英語において実施した分類図表(放射図表)式に基礎国語を中心とする基本語彙群を想定する。
- 4 基本語彙群と教材との関係
基本語彙群相互の関係およびその分析から進んで基礎教材の抽出とその編成という本校の研究テーマへ発展させる。
- 5 他の教科の教科書の語彙の調査と検討。
ここに第一報告として中間調査報告と今後の計画の一部を述べ他日の発表でその成果を明らかにするつもりである。

(表1) 学 習 基 本 語 彙 試 案 品詞別五十音図分類

	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ
動 詞	48	84	48	38	31	38	28	15		
形 容 詞	20	2	3	9	12	4	8	4		
形 容 動 詞	3	0	15	6	1	0	2	2	1	
副 詞	5	17	1	13	11	13	10	4		3
	い	き	し	ち	に	ひ	み	い	り	い
動 詞	36	29	52	11	13	32	25			
形 容 詞	6	5	5	5	2	5	6			
形 容 動 詞	4	6	5	0	2	2	1			
副 詞	21	11	19	9	4	16	2			

国語教材における基本語彙の研究

	う	く	す	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	る	う
動詞	47	43	23	48	15	30	11	7		
形容詞	9	5	12	4	0	4	2	1		
形容動詞	0	0	1	0	0	3	2	2		
副詞	0	10	14	2	0	9	2	3		
	え	け	せ	て	ね	へ	め	え	れ	え
動詞	8	13	18	10	9	3	6			
形容詞	1	4	2	0	2	0	4			
形容動詞	0	1	1	1	0	1	1			
副詞	0	1	3	2	0	5	3			
	お	こ	そ	と	の	ほ	も	よ	ろ	お
動詞	68	35	14	32	19	11	20	30		
形容詞	16	6	1	2	1	5	2	4		
形容動詞	3	0	0	0	1	2	0	0		
副詞	6	19	6	24	4	10	6	7		

表 2 教科書に出た異語彙表

	頻度数の多い			少い	fの計	総数との比%
	f > 10	9 > f > 5	4 > f > 2	f = 1		
動詞	137	131	356	612	1236	62
形容詞	38	27	44	60	169	8
形容動詞	15	22	29	53	119	6
副詞	39	40	113	16	356	18
接統詞	16	11	13	311	51	3
感動詞	9	8	13	18	48	3
総数	254	239	518	918	1979	100
総数との比%	13	12	27	48	100	
	52					

表 3 試案語彙数(A)と新出語彙(E)の比較

	f > 10		9 > f > 5		4 > f > 2		f = 1		f = 0	fの計**		* 頻出率 %
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B		
動詞	117	20	100	31	201	155	187	425	451	1056	631	57
形容詞	34	4	21	6	34	10	21	39	73	183	59	60
形容動詞	11	4	7	15	7	22	10	43	18	53	84	65
副詞	29	10	26	14	54	59	54	110	149	312	193	52
接統詞	12	4	10	1	9	4	2	9	13	46	18	70
感動詞	6	3	5	3	7	6	7	11	22	47	23	52
計	209	45	169	70	312	206	281	637	726	1697	1008	平均 60%

* 頻出率は試案語彙が教科書にどのくらい出ているかの比を指す。 ** fの計には f=0 のも含む

各 個 研 究

表 4 両資料を通し頻度数の多い語彙数

総 数	A *		B *		A + B		A + Bの総数 に対する比%
	971	%	371	%	1342	%	
動 詞	605	64	206	33	811	48	60
形 容 詞	110	60	20	34	130	47	10
形 容 動 詞	35	68	41	50	76	57	5.4
副 詞	163	52	83	43	246	47	18
接 続 詞	33	70	9	50	42	60	3
感 動 詞	25	54	12	52	37	53	2.6
平 均		61.3		46.6		52.5	

* A… 試案にあって教科書に再出している語彙数 %… 試案語彙総数との比
 B… 教科書に新出した語彙数で頻出2以上 %… 新出語彙総数との比
 A+B… 両資料を通し頻度数の多い語彙数